

『元朝秘史』におけるボルテ夫人事件
 —繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスとして—
Reconsidering the Lady Börte incident in the *Secret History of the Mongols*
The climax of the recurring “raids” and “counter-raids”

藤井真湖

FUJII Mako

1. 問題の所在と本論の目的

『元朝秘史』(以下、秘史)は、モンゴル帝国の創始者チンギス・ハーンをその中心的話題とする作品である。筆者は、秘史を“英雄叙事詩”として位置づけ¹、その叙述を対象に一連の構造分析をおこなってきた²。このプロセスにおいて、秘史には明示的に読める事象とは真逆の、あるいは、極めて対照的な非明示的な意味があることを明らかにしてきた。本論は、アンダの非明示の意味を考察した拙論『『元朝秘史』における *anda* 概念—王罕—ジャムカーチンギスの非明示的な三者関係を基に—』と対になる論考で³、本論ではそこで明らかになった、王罕—ジャムカーチンギスの隠された三者関係を前提として考察をおこなうものである。重要なので、この非明示的な三者関係を確認しておきたい。これは、次のようなものである。

チンギスの父イエスゲイの死後、チンギス一家を離れた人々はタイチウド集団についていき、ジャムカ陣営に入り、さらにジャムカ陣営はゆるやかにケレイト陣営に属していた。すなわち、タイチウド集団はジャムカ陣営に、そのジャムカ陣営はゆるやかにケレイト陣営に属していたという諸集団の包含関係があったということである。ここで問題となるのは、明示的には王罕—ジャムカーチンギスの三者関係がそれぞれ対等のように描かれていることを考慮に入れると、明示的に理解していた多くの事柄は、必然的に、非明示的には全く異なることが意味されている可能性が浮上してくることである。本論はそうした視点から、チンギスの正妻ボルテがメルキト集団に“略奪”される事件を再読しようとする試みである。

非明示的な三者関係からみる場合、チンギスの正妻ボルテをメルキトから“奪還”した後に引き起こされる、ジャムカ陣営とチンギス陣営の分離において、ジャムカ陣営からチンギス陣営に移ってくる人々は、実は、もともとチンギス陣営に引き継がれるはずだった、イエスゲイの支配下にいた人々が含まれていたと考えられる。これらの人々がなぜチンギス陣営からジャムカ陣営に移動したのかは明示的には叙述がないのであるが、この事態が起こったと考えられる叙述の地点は、イエスゲイの死後、巻2の§72で、その領民がタイチウドに引き連れられていったという集団移動の述べられる箇所以外に見当たらない。こうした理由に関する叙述が欠落している背景には、三者関係の非明示の意味が関係していると考えられる。

この場合、どの集団がもともとイエスゲイ陣営にいたかを判断するのは難しい⁴。重要

なことは、ジャムカ陣営からチンギス陣営への諸集団の移動が、チンギスによるジャムカからのイエスゲイ遺民の“奪還”という意味をもつことである。つまり、イエスゲイの死後、その領民がタイチウドに引き連れられて一巻2の§72で明示的に叙述されている一、ジャムカ陣営に入った一非明示的な内容一という一連の事件は、イエスゲイ遺民がタイチウド、さらにはジャムカ陣営に“略奪”された事件と表現してもよい事件といえる。そして、このイエスゲイ遺民の“奪還”が、巻3の§120における、見かけ上はジャムカ陣営からチンギス陣営に移ってくる人々についての叙述だということになる。

ここで注目されるのは、チンギスに引き継がれるはずであったイエスゲイの遺民の取り戻しが、チンギスの妻ボルテがメルキトに“略奪”され、それを“奪還”する戦いと連動して叙述されていることである。かたや、遺民の“奪還”という政治的なモチーフ、かたや、妻の“奪還”という私的なモチーフが絡み合いながら叙述されているのである。しかも、興味深いことに、ボルテの“略奪”と“奪還”のモチーフだけが明示的に読み取れる内容となってきたといえるのである。それゆえ、明示的に読み取れるボルテの“略奪”と“奪還”の叙述一本論ではこれをボルテ夫人事件と略すことにする一が、非明示的なイエスゲイ遺民の“略奪”と“奪還”のモチーフといかに関わって構成されているのかを改めて読み解く必要があると考える。

ただし、この問題を扱う場合、単にボルテの“略奪”事件とその“奪還”に関わる叙述だけではなく、もう少し広い範囲、すなわち、イエスゲイ遺民のタイチウドによる“略奪”が描かれる巻2の§72と、その“奪還”が示される巻3の§120までの間の叙述を対象に論じる必要がある。なぜなら、この間には、“略奪”と“奪還”をめぐる事件が繰り返し現れており、その諸事件は絡み合いつつ、最終的に“略奪”と“奪還”事件のクライマックスであるボルテ夫人事件にまで発展していくことが見て取れるからである。つまり、ボルテ夫人事件の非明示的意味は、繰り返し現れる“略奪”と“奪還”をめぐる諸事件と絡めて考察する必要がある。これら繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件の特徴を際立たせることにより、明示的には読み取りにくいチンギスという人物の“非凡なる政治手腕”が立ち現れてくることにもなる。それゆえ、本論では、イエスゲイ死後からチンギスの一時即位までに現れる“略奪”と“奪還”というモチーフのクライマックスとしてボルテ夫人事件を扱いつつ、ボルテ夫人事件の“真相”らしき仮説を提示することにした。

2. 議論の流れと方法論

まず、考察の対象となる巻2§72から巻3§120までの節の要約を示す。その上で、この叙述の中で繰り返し現れる“略奪”と“奪還”の諸事件を、ボルテ夫人事件を含め6つ指摘する。次に、その6つの事件を一つずつ考察しながら、ボルテ夫人事件の“真相”らしき仮説を提示する。

本論では、ロラン・バルトが提起した構造分析の各レベルである、行為項レベル、機能レベル、物語行為レベルにおける行為項レベル（いわゆる登場人物のレベル）を中心にし

た分析方法を採ることにしたい（バルト 1979）。

3. 『秘史』巻2 §72～巻3 §120 までの要約

まずは巻2 §72～巻3 §120 までの要約を示すことにする。

表1：『秘史』巻2 §72～巻3 §120 までの要約

該当節	内容の概略
§72	チンギスの父イエスゲイの死によって、イエスゲイの支配下にあった人々は、チンギス一家を見放し、タイチウドと一緒に出て行ってしまふ。
§73	チンギスの母ホエルン夫人が一部の人々を連れ戻すが、連れ戻された人々はタイチウドの後を追って移動する。
§74	子育てに奮闘するホエルン夫人についての叙述。
§75	ホエルン夫人の子供の成長についての叙述。
§76	4人の子供たち（チンギス、カサル vs ベクテル、ベルグテイ）が魚の奪い合いをする。
§77	チンギスとカサルがベクテルを殺害。ベクテルはベルグテイの命を助けるように言って死ぬ。
§78	ホエルン夫人がベクテル殺害を知り、チンギスとカサルを叱責する。
§79	タイチウドのタルグタイ・キリルトクがチンギスを自分たちにさしだすようにカサルとベルグテイに言う。
§80	チンギスは密林の中に隠れるが捕えられる。
§81	チンギスはタイチウドの家々を順番に回らせられ監視されるが、ある夜、“気の弱い若者”が見張っていたところ、チンギスはその若者から手枷を引いて頭を一撃してオナン河に逃げる。
§82	ソルカン・シラがチンギスを発見するが、タイチウドの人々には言わず逃す。
§83	ソルカン・シラがチンギスの搜索を翌日に引き延ばさせてチンギスを助ける。
§84	チンギスがソルカン・シラ宅に行くことを決意する。
§85	ソルカン・シラのところへ行くと、ソルカン・シラは迷惑がるが、彼の息子たちはそのような父を非難し、一家はチンギスをかくまう。
§86	タイチウドの搜索人がソルカン・シラ宅にチンギスを探しに来るが、うまくかわす。
§87	ソルカン・シラがチンギスに食物と馬を与え、家路に向かわせる。
§88	チンギスが無事帰宅する。
§89	チンギス一家が野生の動物を狩猟して食いつないだという叙述。
§90	盗賊がきてチンギス家の8頭の馬を連れ去り、チンギスが追跡する。その際に、ボオルチュと出会う。チンギスとボオルチュは盗賊のところにいき、8頭を取り戻してくる。
§91	盗賊が追ってくると、チンギスは弓で射あうが、夕暮れになったのでそのまま逃げる。
§92	チンギスが奪還に力を貸してくれたお礼として馬をボオルチュに差し出そうとするが、ボオルチュはを友人として手助けしたからと言って受け取らない。
§93	チンギスとボオルチュは、ボオルチュの父ナク・バヤンのもとに帰宅。ナク・バヤンは互いに

	捨てあうなど言いつつ、チンギスに旅の糧食を与えて帰宅させる。チンギスが無事帰宅する。
§ 94	イエスガイが死ぬ前にチンギスの妻にするという約束を取り交わしていた、オンギラト集団のデイ・セチェンの娘ボルテを、チンギスはベルグテイと共に迎えに行く。
§ 95	娘をチンギスのもつに送り届けたボルテの母チョタンが帰った後、チンギスはベルグテイにボオルチュを連れて来させる。
§ 96	義母チョタンの持ってきた引き出物をもって、チンギスはケレイトの王罕のもとに会いに行き、王罕が父イエスガイのアンダであったことに触れ、王罕のことを父と同じような存在だと言う。王罕はこれに対して、チンギスの散逸した民を集めてやろうと約束する。
§ 97	ウリヤンハイのジャルチウダイ老人がジェルメをチンギスに仕えさせるために連れてくる。老人は、チンギスの生まれたときむつきを与えたが、その時は幼かったので連れて行ったと説明。
§ 98	夜明けに、何者かがチンギス一家を襲撃する。ホエルン母の家で働くコアクチン老婆が「タイチウドが攻めてきた」とホエルンを起こす。
§ 99	チンギスたちは起きて 8 頭の馬にそれぞれ乗る。1 頭の馬を予備の馬としたので、ボルテ夫人に馬が欠ける。
§ 100	チンギス兄弟たちはボルハン山に登る。コアクチン老婆はボルテ夫人を隠す。兵士たちに見つかるが、うまく隠しとおす。
§ 101	コアクチン老婆が急いで逃げようとする、車の車軸が折れてしまう。その後、徒歩で逃げようとするのを兵士たちに見つかってしまう。すでに兵士たちは「ベルグテイの母」を奪っていたが、さらにボルテを奪う。兵士たちはボルハン山に登ってチンギスを追跡する。
§ 102	兵士たちはボルハン山を 3 回めぐるとチンギスを捕獲できない。兵士たちの正体が明かされ、メルキト集団であることに言及される。襲撃の理由は昔ホエルンを奪われた復讐にあると説明。メルキトたちは女性たちを奪ったので復讐を遂げたと行ってボルハン山を降りて帰宅する。
§ 103	メルキトが帰宅したどうかをチンギスがベルグテイ、ボオルチュ、ジェルメの 3 人に確認させてから、チンギスがボルハン山から下りる。チンギスのボルハン山に感謝する言葉。
§ 104	チンギス、カサル、ベルグテイの 3 人がケレイトの王罕のもとに行き、メルキトに奪われたボルテ夫人の救援を要請する。王罕は了承し、自分の軍から 2 万、ジャムカの軍から 2 万出させて出陣することを宣言する。王罕はチンギスに、ジャムカにこの言葉を伝え、また合流の場所をジャムカが定めるよう伝言するように言う。
§ 105	王罕のもとから帰ってチンギスはカサルとベルグテイをジャムカに遣わして王罕の言葉を伝えさせる。ジャムカはチンギスに同情する言葉を伝言させメルキトへの出陣を約束する。
§ 106	ジャムカが王罕とチンギスの二人に使者を遣わして、2 万の兵を連れてオナン河の源ボトガン・ボオルチで合流することを伝える。
§ 107	チンギスは、カサルとベルグテイが帰ってきて伝えたジャムカの言葉を王罕に伝える。王罕はこれを知り、弟ジャカ・ガンボの兵 1 万、自分の兵 1 万の計 2 万の兵を整えることにする。チンギスはキムルカ河のアイル・カルガナで王罕の兵士たちと合流する。

§ 108	チンギスと王罕、ジャカ・ガンボはそこから合流の地ボトガン・ボオルチに着くと、ジャムカはすでに3日前に到着していた。待たされたジャムカが不満を漏らす。
§ 109	チンギス、ジャムカ、王罕の兵士たちは、ボルテを略奪したメルキト集団のトクトア・ベキを襲撃する。トクトア・ベキとダイル・ウスンは数人でセレンゲ河を下って逃亡する。
§ 110	メルキト集団が夜陰に乗じて逃げていくさいに、チンギスはボルテ夫人と再会し、ボルテ夫人を奪還する。
§ 111	メルキトの3集団が、昔、イエスゲイがトクトア・ベキの弟チレドからホエルンを略奪したということで、その復讐としてボルテ夫人を略奪し、チレドの弟チルゲルに関わせたという説明。チルゲルは、自分がボルテ夫人に関わったためにメルキト集団に災いをもたらしたと言って逃げ出す。
§ 112	ベルグテイがメルキト集団に略奪された母の住む家の近くまでいくが、ベルグテイの母はメルキトに残ることを決意しベルグテイには会わず逃げ出す。300のメルキトの人々を根絶。
§ 113	チンギスは王罕とジャムカに感謝する。
§ 114	ウドウイド・メルキトが逃げる時に“我々の兵士たち”がクチュという名前の五歳の幼児が當地に残されているのを発見し連れ帰ってホエルン夫人に贈る。
§ 115	チンギス、王罕、ジャムカの3人がメルキトを襲撃して退却するときに、チンギスとジャムカはコロコナクの森を指して退いたのに対し、王罕はトウラ河のカラ・トゥンを指して退く。
§ 116	チンギスとジャムカがコロコナクの森で贈り物を交換し盟友になりあったことが叙述される。また、チンギスが11歳のときにも盟友になりあう儀礼をおこなっていたことにも言及される。
§ 117	§ 116の続きで両者が交換し合った贈り物に言及され、両者が親しみ合って宴を催したという内容。
§ 118	チンギスとジャムカが1年親しみあったが、次の年の半ば頃、ジャムカの謎の言葉をボルテ夫人が批判的に理解し、ジャムカと別の宿営地に移動しようと言う。
§ 119	§ 118に続く内容で、チンギスはボルテ夫人の言を受け入れ、チンギスたちが移動していくときに、タイチウド集団がジャムカ側に動き、タイチウドの宿営地跡に残されたココチュという幼児を“我々の者”が連れてきてホエルン夫人に贈る。
§ 120	チンギスとジャムカが宿営地を別にして分かれるさいに、ジャムカ陣営から、チンギス陣営にいくつかの集団や人が移動してくる。

以上が、§ 72～§ 120までの概要である。以下の考察においては適宜参照されたい。

4. 秘史の巻2 § 72～巻3 § 120までの行為項分析

4. 1. “援助者”を入れない第一の行為項分析

この節では、3. で示した巻2 § 72から巻3 § 120までの範囲を対象として考察をおこなう。まず、次のようなA～Fの6つの“略奪”と“奪還”の出来事がこの範囲に含まれていることを、表2で確認しておきたい。

表2:『秘史』巻2§72から巻3§120における6つの“略奪”と“奪還”

	“略奪”と“奪還”の出来事	該当箇所
A	イエスゲイ遺民の“略奪”(イエスゲイの死後、その民がタイチウドと移動) ↓(援助者:ボルテ夫人?) “略奪”された民の“奪還”(ジャムカ陣営からの人々の移動)	§72 (§118?) §120
B	ベクテルとベルグテイによる魚の“略奪” ↓(援助者:カサル) チンギスによる未来の魚の“奪還”(ベクテルの殺害)	§76 (§77) §77
C	タイチウドによるテムジンの“略奪”(タイチウドによるテムジン拉致) ↓(援助者:ソルカン・シラとその息子たち) テムジンによるタイチウドからの自身の“奪還”(無事逃亡して帰宅)	§79 (§82~§87) §88
D	チンギス家の8頭の馬の“略奪” ↓(援助者:ポオルチュ) 8頭の馬の“奪還”	§90 (§90) §90~§91
E	ジェルメの“略奪”(ジャルチウダイ老人が幼いという理由で連れ帰ったと説明) ↓(援助者:ジェルメの父ジャルチウダイ老人) ジェルメの“奪還”(ジャルチウダイ老人が理由なしにチンギスのもとに連れてくる)	§97 ⁵ (§97) §97
F	メルキトによるボルテの“略奪” ↓(援助者:王罕とジャムカ) チンギスのメルキトからのボルテの“奪還”	§101 (§104~§109) §110

表2のAの部分における援助者の項目のボルテ夫人に「?」記号がついているが、この理由については後続の部分で詳細な議論を展開するつもりであるので、ここでは触れないことにする。表2のA~FのDとF以外の事例については、“略奪”と“奪還”という出来事としてとらえられるのかという点について、若干説明が必要と思われるので、以下、その補足をしておく。Aは拙論で示した非明示的な内容であり⁶、明示的には叙述されていない“略奪”と“奪還”の出来事である。B、C、Eはかなり変則的なものといえる。それゆえ、まずは、明示的によく示されたDやFの事例を説明しておく。

DとFの2つの事件における特徴は、援助者が登場していることである。こうした援助者がいるからこそ、“略奪”を“奪還”に導くという筋立てとなるのである。逆に援助者こそが、“略奪”と“奪還”をつなぐ立役者であるという考えを採ることができる。すると、援助者という観点からみると、一見したところでは、“略奪”と“奪還”の出来事として捉えにくいCの事件もそのような出来事として捉えられるようになる。

Cの場合、援助者をタイチウドのソルカン・シラとその息子たちとみなすことができる。なぜなら、“略奪”とは、あるべき人やモノがあるべき位置から失われる状態であるとする

と、Cのテムジンがタイチウドに拉致される事件も比喩的な意味で“略奪”と捉えることができる。拉致が“略奪”であるとする、拉致の状態が解決される状態も比喩的に“奪還”と表現することが可能であろう。

Cのような変則的な“略奪”と“奪還”の捉え方が可能になると、Bのような、イエスゲイの息子たちの中の魚の奪い合いとその結果による、チンギスとカサルとの共謀による、“ベルグテイの母”の息子ベクテルの殺害もまた、一見すると、ベクテル殺害のほうに目が向くが、“略奪”と“奪還”の事件としてとらえることができるのである。表2に示したように、“略奪”の捉え方としては、「ベクテルとベルグテイによる魚の“略奪”」、そして、ベクテルの殺害というのは、「チンギスによる未来の魚の“奪還”」として解釈することになる。この場合、援助者はカサルということになる。

Eのジェルメを連れてくるという内容の場合、従来、“略奪”と“奪還”の枠組みで捉えられたことはなかった例であろう。しかし、ジェルメの父ジャルチウダイ老人がジェルメを連れてくるのが§97、その直前の§96でチンギスがボルテの引き出物を持ってケレイトの王傘に挨拶に行っていることを見ると、ジャルチウダイの行動は、チンギスがケレイトの王傘の傘下に再び入ったことをみとどけた後ということになる。実際、ジェルメは、チンギスとジャムカのあいだの最初の亀裂が生まれたときに、ジェルメの弟であるチャウルクン、スベテイ勇者がウリヤンカン集団から離れてジェルメのもとに合流してきたと§120にあるので、ジェルメは、少なくともその時点においてはジャムカ陣営のもとにいたことがわかる。そして、ジャムカはすでに述べたように、ゆるやかにケレイトの王傘の傘下にあった⁷。チンギスがケレイトの王傘に会いに行ったことを知り、ジャルチウダイ老人は安心してジャムカのもとにいた自分の息子ジェルメをチンギスのところに連れてきたのだと推測できる。つまり、ジェルメはジャムカに“略奪”されていたと解釈しうるのである。

A~Fの補足は以上であるが、実は、Aは他の5つの出来事とは異なる変則性を持っていることを指摘しておきたい。なぜなら、イエスゲイ遺民の“略奪”の部分はこのAの位置でよいが、その“奪還”の部分はFの後に置かれるべきものだからである。すなわち、B、C、D、E、Fの5つの“略奪”と“奪還”の出来事は、そっくりそのままAの“略奪”と“奪還”の中に埋め込まれているのである。この関係は、次の①のように簡略して表せる。

①Aの“略奪”部分—(B+C+D+E+F)—Aの“奪還”部分

Aをこのように捉えると、もしかしたらその間に埋め込まれている、他のB、C、D、E、Fの一連の出来事を、Aの出来事と連動する出来事として捉えることができるかもしれないという考えを起こさせる。そうすると、すぐに気がつくことは、BからFの5つのうち、Fの出来事は、Aと連動している出来事だということである。なぜなら、Fでメルキトか

らボルテを“奪還”する際に、チンギスはジャムカ陣営を巻き込み—直接的には王罕がジャムカを直接動員しようとしているのだが—それを契機にジャムカ陣営に吸収されていたイエスゲイ遺民を取り戻すことができたといえるからである。すなわち、Aの“略奪”部分と“奪還”部分に同様に埋め込まれていながらも、BからFの5つのなかで、Fは他の4つとは異なり、密接に連動している部分ということになる。それゆえ、①は次の②のように表わせることになる。

②Aの“略奪”部分—(B+C+D+E)+F—Aの“奪還”部分

ところで、一見したところ、他の部分はAと無関係に見えるが、実はAと密接に関連している。以下、これを順に示していくことにしたい。その際、行為項分析を二段階分けておこなうことにしたい。第一の行為項分析は、表2にある援助者の行為項を除いた、“略奪”され“奪還”される行為項の考察であるのに対して、第二の行為項分析は、援助者という行為項を入れて考察するものである。まずは、第一の行為項分析をおこなう過程において、すべての事件をAと結びつけて論じることができることを示してみたい。以下、②の括弧内の、B、C、D、Eの順で述べよう。

Bは、表2で示したように、チンギスがカサルと共にベクテルを殺害するという内容である。この部分で述べられる事件は、見かけは魚の奪い合いから生じたベクテル殺害という、少年たちの暴力的な小競り合いとその悲劇的結末であるが、非明示的には、チンギスの母ホエルンか「ベルグテイの母」とされる人物のどちらがイエスゲイの正妻であったかをめぐる代理闘争の様相を帯びている⁸。この闘争は、両者の息子たちの将来にとって重要な意味を帯びており、どちらの妻の息子がイエスゲイ遺民を継承するべきかの闘争に連続しているのである。

結果的に、ベクテルを失った「ベルグテイの母」の地位は、ホエルンのそれよりも一挙に下がり、ホエルンの息子たちがイエスゲイ遺民を引き継ぐ道を開いたことになる。両世代を入れて整理すると、次のようになる。ベクテルの殺害は、「ベルグテイの母」の地位を一気に下げることになり、その結果、ホエルンがイエスゲイの正妻の位置を名実共に獲得し、さらにその結果、ホエルンの息子たちがイエスゲイ遺民を継承する流れを決定付けたということになる⁹。このように、イエスゲイ遺民の継承権を誰が持つのかというテーマが隠されているので、Bはイエスゲイ遺民の“略奪”というAに密接に関係していることになる。それゆえ、BはAに連続しているので、括弧の外に出して、③のようにAの続きとして直接に書き記すのが適切だということになる。

③Aの“略奪”部分—B+(C+D+E)+F—Aの“奪還”部分

次にタイチウド集団によるテムジン(チンギス)の“略奪”を内容とするCであるが、

CはBと連動していることが観察される。確かに、Bの部分で、イエスゲイの二人の未亡人のうちホエルンが正妻としての地位を確立したといえるが、ベクテルの殺害はチンギスとカサルの二人で行われたものであった。それゆえ、イエスゲイ遺民をチンギスとカサルのうちどちらが引き継ぐべきなのかは明らかではなかったといえる。それが示されたのが、Cの事件だということになる。なぜなら、Cのタイチウドによる拉致の際に、タイチウドは、「自分の兄を、テムジンをよこせ。お前ら他のものには用はない」と言っているからである（巻2§79）。これに基づくと、タイチウドは、ホエルン一家の長をカサルではなく、チンギスと認定したということである。ゆえに、このCも、Bに連なりつつAと関連付けられるので、③は次の④のように書き直される。

④Aの“略奪”部分—B+C+(D+E)+F—Aの“奪還”部分

次に、Dである。やはりDの場合も、BやCに連動していることが観察される。なぜなら、Dの内容は、チンギス家の8頭の馬という財産が略奪されたときに、誰が取り戻すかということが話題になっており、イエスゲイの遺した馬という財産を誰が引き継いで管理するのかというテーマが隠されているからである。この場合、最初に名乗りを上げたのが、ベルグテイであり、次にカサルであり、最終的にチンギスが残った1頭の馬にまたがって“奪還”に向かったとある（巻2§90）。

ベルグテイが最初に名乗りをあげているところを見ると、Bで遺産相続人として除外されたはずのベルグテイが、まだ断念していない様子が見て取れる。ベルグテイがチンギスに対抗していることの意味については別稿で取り上げたので、ここでは省く¹⁰。ベルグテイだけでなく、Cで遺産相続人としてカサルが除外されたはずなのであるが、カサルもまだ断念していなかったことが確認される。カサルの立場に立つと、兄チンギスが当主として認められたのはあくまでもタイチウドによってであり、彼らの間の中での了解事項ではなかったという考え方をしていたのではないかと推測される。

しかし、ここでチンギスが8頭の馬を取り戻したことにより、名実ともに、チンギスがイエスゲイ遺民の継承者としての地位を築き上げたということになる。すなわち、このDによって、ようやくチンギスは他の異母兄弟や同母弟を押しつけて、イエスゲイの遺民の相続人としての地位を確立したのだと考えられる。したがって、Dも、BとCに直接連動しつつ、大きくはAの問題圏の中に納まっているといえる。それゆえ、④は⑤として図式化しうることになる。

⑤Aの“略奪”部分—B+C+D+(E)+F—Aの“奪還”部分

最後に、Eのジェルメの“略奪”の場合を検討しよう。ジェルメは幼いときにチンギスに与えられていることが決まっていたものの、この決定はイエスゲイの存命中のことであ

った。つまり、イエスゲイの死後、ジェルメの父は誰をイエスゲイの真の後継者とみなすかについて判断しかねるところがあったが、B、C、Dの流れでやはりチンギスを後継者とみなすのが妥当だと判断したのだらうと思われる。つまり、Eは一見、B、C、Dとは無関係に見えるが、密接に連動しているということである。むろん、それだけでなく、前述のように、ジェルメをチンギスのもとに連れてくる§97のすぐ手前でチンギスがケレイトの王罕の傘下に入ったことがこの行動を後押ししたのであろう（表1の§96を参照）。

以上、Eが手前のB～Dと一見無関係ながらも連続しているのを確かめたが、Eは後続のFとは一見、無関係に見える。しかし、EとFはやはり密接に連動していることが観察されるのである。なぜなら、Fのボルテ夫人事件は、ボルテ夫人に「馬が欠けた」ことから生じた事件であったといえるが、チンギス一家の8頭の馬のうちの1頭にEで登場したジェルメが乗っているからである。つまり、もしジェルメがこの8頭のうちの1頭に乗っていなかったら、ボルテ夫人には逃げるための馬があったということになるからである。実は、8頭のうちの1頭は予備に供されたので、予備に1頭を用いなければ、ボルテ夫人に馬が欠けることはなかったといえるのだが、このことについては後続の部分でその意味を再度取り上げるので、ここでは横においておく。

いずれにせよ、このように、誰が馬に乗るかという点で、EはFと直接連動しているといえるのである。したがって、⑤は次の⑥のように書き換えられることになる。

⑥Aの“略奪”部分-B+C+D+E+F-Aの“奪還”部分

以上、“援助者”という項を入れない第一の行為項分析を終えたことになる。ここから判明することは、秘史では次の2つの事柄、すなわち（1）イエスゲイ遺民の“奪還”を行う者すなわちイエスゲイ遺民の後継者としてチンギスこそ相応しいこと、（2）A～Fの事件がすべてイエスゲイの領民の“略奪”と“奪還”という文脈のなかで理解されること、の（1）と（2）が論理的に全く無駄のない形で叙述されているということである。

3. 2. “援助者”を入れた第二の行為項分析

3. 1. は“援助者”の項を入れない考察であったが、この節では“援助者”を入れた第二の行為項分析を行い、B～Fの5つがAとの関連で捉えられることを示しながら、Fの“援助者”すなわち王罕とジャムカの特異性を指摘することにした。それによって、Fのボルテ夫人事件の“真相”なるものが立ち現れてくるところに目を向けたい。議論の手順としては、まず、表2のCやDにおける援助者の存在の仕方が、Fにおけるその雛形になっていることを提示したい。

援助者をソルカン・シラとその息子たちとするCでは、タイチウドという敵の中にも味方（ソルカン・シラとその息子たち）が存在するということが示されている。ただし、援助者としては、秘史ではソルカン・シラよりも彼の息子たちが強調されている。なぜなら、

彼らのほうこそ父であるソルカン・シラよりもチンギスを積極的に助けようとしたからである¹¹。

援助者をボオルチュとする D は、一見したところ、チンギスの若き日における、ボオルチュとの出会いを物語る冒険談以上の意味を付されていないように見える。しかし、それは、このボオルチュの出自がこの箇所では明かされておらず、単に“ナク長者の一人息子”とのみ表現されているからである。だが、ボオルチュが“アルラト”の出身者であることは、A の“奪還”の部分にあたる巻 3 の § 120 に「ボオルチュの弟ウグレン・チェルビはアルラトから離れて、自分の兄ボオルチュのもとに合流してきた」とあることから理解される。

とはいえ、ここでは同時に、ナク長者の一人息子であるはずのボオルチュに弟がいたという矛盾も出てくることになる。この問題についてはここでは問わないとしても、§ 95 で、ボオルチュが父に言わずチンギス陣営に加わったことは、次のような非明示的意味があったと推測される。すなわち、アルラトという集団がもともとイエスガイ遺民のもとにいたかどうかは不明だが、少なくともジャムカ陣営に属していた集団だということである。それゆえ、チンギス陣営の基盤が脆弱なうちは、ボオルチュの引き抜きは慎重になされなければいけなかったのだと推測される。

C と D における以上に述べた援助者は、共通した型の援助者であるといえる。つまり、敵の中にも味方がいるということを示しており、C のソルカン・シラとその息子たちはタイチウド集団に属しているので、彼らがチンギスの援助者になることは“敵の中に味方がいる”ということを表わしている。これと同様に、D のボオルチュは、ジャムカ陣営に属していたと考えられるので、ボオルチュがチンギスの援助者になることも“敵の中に味方がいる”ということになるのである¹²。

これらの C や D が F の雛形になっていることを示す前に、その他の B や E を見ておこう。B を後回しにして、先に E を見ておく。E の援助者すなわちウリヤンカンのジャルチウダイの場合、ジャルチウダイと彼の連れてきた息子ジェルメは、§ 120 に基づくと、イエスガイ亡き後、ジャムカ陣営に入っていたらしい。§ 120 は A のイエスガイ遺民の“奪還”部分であるが、ここで「ジェルメの弟チャウルカン、スベテイ勇者はウリヤンカンから離れてジェルメのもとに合流してきた」とある。ジェルメの弟がジャムカ陣営から移ってきたということは、ジェルメがジャムカ陣営にいたことを示している。それゆえ、ジェルメの場合は、明示的にチンギスの味方のように書きながらも、イエスガイの死後に実は敵となっていたことが判明する。

敵の中にも味方がいる、ということをも裏返してみると、味方の中には敵がいる、ということになる。C や D が前者であるとすると、この E はまさに後者に該当しよう。E だけでなく、ベクテル殺害を内容とする B も同じである。B では、チンギスの味方であるはずのベクテルやベルグテイが敵として登場しているからである。それゆえ、チンギスはベクテルを殺害することで、その弟ベルグテイを配下においているのである。その際に、チンギ

スは、ベクテル殺害に同母弟カサルを関わらせることにより、潜在的ライヴァルであったカサルを巧妙に味方につけているといえる。

以上、B、C、D、Eのうち、CとDは敵の中に味方がいる型の援助者であるのに対し、BとEは味方の中に敵がいるという型の援助者であることを明らかにした。ここで明らかにした、敵の中に味方がおり、味方のなかに敵がいる、というような状況の中で、残るボルテ夫人事件のFが発想されたのだと考えられる。Fでの援助者は明示的にケレイトの王罕やジャジラアのジャムカである。しかし、非明示的には、彼らは敵なのである。拙稿で論じたように¹³、ジャムカはイエスゲイの領民をタイチウド経由で“略奪”した上で、ゆるやかにケレイトの王罕の支配下にあったからである。このように、ジャムカや王罕という敵を味方にして、ボルテ夫人を“奪還”したというのがFの事件の非明示的意味なのである。チングスは、CやDにおけるような、敵の中に味方がいる応用として、Fにおいて、ボルテの“奪還”に王罕やジャムカを動員させるという方法を編み出したのだといえる。

考察がここまで進んできたところで、指摘すべきことがある。それは、Aにおける、イエスゲイ遺民を取り戻す際のボルテ夫人は、チングスがジャムカと決別する際に、その契機を与えたという意味で、表2で援助者としたものであるが(巻3 §118)、ここには問題も含まれていることである(それゆえ前述のように表2において「ボルテ夫人」ではなく「ボルテ夫人？」としたのである)¹⁴。その問題とは、ボルテ夫人を“援助者”とみなすと矛盾が出てくるように思われることである。なぜなら、第一の行為項分析でみたように、Aの“奪還”部分はボルテ夫人事件のFと連動している事件であるにもかかわらず、Fで被害者であるボルテ夫人が一連の事件の帰結であるAの“奪還”部分で“援助者”となっていることは矛盾しているように映るからである。援助者というのは、そもそも被害者を救うために存在しているので、両者が同一人物ということにはやはり矛盾を感じざるを得ないのである。

しかし、まさにこの矛盾こそ、事の本質をあらわにするものであるということを以下に示したい。この場合、Fの“援助者”をもう一度よく見る必要がある。なぜなら、ケレイトの王罕は、B(カサル)、C(ソルカン・シラと息子たち)、D(ボオルチュ)とは異なって、自ら名乗り出てきた援助者ではないからである。これは、チングスの意志による援助者(王罕)である—ジャムカはそして王罕によってチングスの援助者として動員された—。

さらに指摘したいのは、たとえチングスの意志で援助者を立てることができたとしても、Fのボルテ夫人事件そのものがなければ援助者を立てようがないということである。そうなると、Fのボルテ夫人事件はチングスによって意図的に作り出されたという可能性が浮上してくる。なぜなら、Fのボルテ夫人事件が偶発的なものであるとすると、A~Fの緊密な構成にそぐわないように思われるからである。第一の行為項分析でみたように、B、C、D、Fは領民の“略奪”と“奪還”というAのテーマに最終的に収斂しているのである。

そうすると、Fは見かけ上、メルキトにボルテを奪われた事件になっているが、非明示

的には、ボルテはメルキトによって“奪われた”のではなく、メルキトに“奪わせた”事件だということになる。このような考察になってくると、やはり気になるのは、前述したように、ボルテの“略奪”のさいに、「ボルテに馬が欠けた」という叙述である（表1の§99を参照）。明示的にも叙述があるように、馬はもう1頭存在していたのであるが予備としたのであった。つまり、もし予備を考えなければ、ボルテに馬は実は欠けていなかったのである。これは、チンギスが敢えてボルテに馬を与えなかったと見てよい。ボルテ夫人事件がチンギスによって意図的に仕組まれたのだと見れば、この事件でボルテ夫人が被害者であり、それを包括するAの事件の帰結でボルテ夫人が援助者であることは矛盾なく理解されることになる。チンギスにしてみれば、ボルテ夫人が被害者となってくれたおかげで、イエスゲイ遺民を取り戻すことができたからである。それゆえ、ボルテ夫人は、被害者であり、且つ、援助者となるのである。

以上の第二の行為項分析によって、重要な非明示的意味を明らかにすることができたといえよう。すなわち、チンギスは、味方の中に敵がおり（BとE）、敵の中に味方がいるということを知り（CとD）、最終的にこの原理をイエスゲイ遺民の“奪還”のために、敵（王罕とジャムカ）を“援助者”として自ら仕立て上げるFのボルテ夫人事件を作り上げた、ということになる。この際に、ボルテ夫人を利用し、「奪われた」ように見せかけ、「奪わせた」ということになる。

正妻を政治利用するというのは非情そのものであるように見えるが、チンギスの立場に立つと、次のような論理が考えられるだろう。すなわち、そもそも領民を奪われた背景には、父イエスゲイが時期尚早に亡くなったことがあり、その死の原因を作ったのは、イエスゲイがオングラトからボルテを嫁として娶りに行ったからであるということである—そのためにタタルに殺害されることになった—¹⁵。したがって、ボルテがイエスゲイの死の遠因をつくったということである。つまり、ボルテによって失った父イエスゲイの遺民を、ボルテによって（ボルテを利用して）“奪還”するという論理である。

ここでおそらく直ちに引き起こされる疑問は、チンギスがボルテを奪わせるにしても、その相手がメルキト集団であることを予期できていたか否かということである。これについては現段階においては不明である。少なくともいえることは、チンギスが襲撃してきた集団がコアクチン老婆の言ったようなタイチウド集団ではないことだけは、確実に知っていたと考えられることである。なぜなら、チンギスは、Fのボルテ夫人事件の前に、明示的に王罕の傘下に入ったので（表1の§96を参照）、ジャムカを通して王罕の傘下に入っていたタイチウド集団がチンギス一家を襲撃する可能性はなかったといえるからである。

4. まとめ

本論の議論の要点をまとめると、次のようになる。

表2のFのボルテ夫人事件—メルキト集団にボルテ夫人を奪われた事件—は、一般的に、“略奪”と“奪還”の単独モチーフとして認識されているといえるが、この事件の本質は、

実は、チンギスがイエスゲイの死後、散逸してジャムカ陣営に吸収され、そして緩やかにケレイト集団の参加にあったイエスゲイ遺民を取り戻すことにはあったのではないかと考えられる。拙論で展開した王罕ージャムカーチンギスの隠された関係に基づく¹⁶、イエスゲイの死後、イエスゲイの傘下にいたタイチウド集団はチンギス一家を離れたと秘史に明示的に叙述されているものの、非明示的には、この集団はその後ジャムカ陣営に属すようになり、さらにジャムカ陣営はゆるやかにケレイト陣営に属していたのである。こうした非明示的な集団関係は、当然ながら、秘史の明示的叙述の再読を要請するものである。特に、ボルテ夫人事件では、その救出に、ジャムカと王罕が絡んでいるために、この事件は読み直しを強く必要としている。そこで、本論においては、イエスゲイ遺民の取り戻しとボルテ夫人事件が密接な関わりを持っている可能性を前提として、ボルテ夫人事件を、イエスゲイの遺民がチンギス一家を置き去りにする § 72 からイエスゲイ遺民を取り戻す § 120 までの範囲のなかで眺めることにした。

実際、この範囲の幾つかの主要な出来事は、一見、“略奪”と“奪還”のモチーフとはみなせないものの、そのように比喩的に解釈できる。そして、ボルテ夫人事件は、そうした繰り返し現われる“略奪”と“奪還”の諸事件のクライマックスに位置づける事件となっていることが立ち現れてくるのである。このような推測が実際に妥当なのかどうかを、本論ではロラン・バルトの『物語の構造分析』で示された行為項分析（いわゆる登場人物の分析）を通して考察した。

そしてこの考察の際、援助者を入れずにおこなう第一段階の行為項分析と援助者を入れておこなう第二段階の行為項分析とを順におこなった。第一段階においては、繰り返し現われる“略奪”と“奪還”の事件がA～Fの6つ存在していること、そして、実際には、Aの“略奪”と“奪還”の間に、B～Fの5つの事件が挿入されていることを指摘し、B～Fのそれぞれの事件について、どのように前後につながり、且つまたAと関係しているかを示した。第二段階においては、こうしたA～Fの6つの事件における援助者に着目することにより、援助者には“敵の中に味方がいる”型と、“味方の中に敵がいる”型があることを指摘した。そして、Fのボルテ夫人事件の援助者は、ジャムカや王罕という“敵の中に味方がいる”型の援助者であることを明らかにした。さらに、このFのボルテ夫人事件の援助者がその他の事件の援助者とは異なり、自ら志願した援助者ではなく、チンギスが援助者として選んだ人物（王罕）であることを指摘した。そして、この場合、チンギスは、他の事件における2つの型の援助者の経験を基に、敵である王罕を“援助者”に仕立て上げたのだという可能性を提示した。

とはいえ、援助者を選んだとしても、ボルテ夫人事件そのものが生起しなければ、援助者を仕立てようもないので、チンギスはボルテが奪われるように仕組んだ可能性に言及した。重要なので繰り返すが、秘史においては、明示的に、1頭の馬が予備用にあったにも関わらず、ボルテ夫人の乗る馬が欠けたという叙述がある。この明示的内容は本論の提起した非明示的内容と符合している。何よりも、本論で示した、繰り返し現われる“略奪”

と“奪還”の緊密な連鎖の中で、Fのボルテ夫人事件だけが「偶然」に依拠しているとは考えにくい。それゆえ、ボルテ夫人事件の“真相”なるものとは、明示的にはチンギスが被害者となりつつ、非明示的には、チンギスがボルテを被害者にして、その“奪還”に、敵である王罕やジャムカを巻き込むことで、最終的にジャムカ陣営に吸収されたイエスゲイ遺民を取り戻そうとする政治的戦略だった、ということになる。ただし、ボルテ夫人を奪われたさいに、そのボルテ夫人を「略奪した」集団がタイチウドではないことは知っていたとしても、それがメルキトであることをチンギスが予期していたかどうかについては現段階の考察では定かにはできなかった。これについては今後の課題としたい。

注釈

1 筆者がここで用いるところの“英雄叙事詩”とは、通常用いられていると考えられる対象よりも広いものを指す。具体的にいうと、明示的な内容と、それとは真逆の内容、あるいは対照的な内容を、非明示的な内容としてもっている言語芸術作品のことである。

2 藤井真湖 (2009, 2010a, 2010b, 2011a, 2011b, 2013a, 2013b) を参照。

3 『現代社会研究科研究報告』第10号に掲載予定の論文『『元朝秘史』における anda 概念—王罕—ジャムカーチンギスの非明示的な三者関係を基に—』を参照 (以下、この論を2014とする)。

4 ただし、本論で取り上げているボオルチュやジェルメのように、ある程度推測できる人物もないわけではない。

5 ここでは、ジャルチウダイ老人がジェルメを連れ帰ったという行動は秘史には直接に言及されておらず、§97で過去のことについて説明されているだけである。

6 藤井 (2014) を参照。

7 藤井 (2014) を参照。

8 藤井 (2011a) を参照。

9 藤井 (2011a) を参照。

10 藤井 (2011a) を参照。

11 これについては藤井 (2013a) を参照。

12 むろん、もともと、イエスゲイの傘下にいた人々だと言えるなら、実はこの敵とは味方であるとも言えるのだが、この時点における状態として“敵”としておく。

13 藤井 (2014) を参照。

14 ボルテ夫人を“援助者”とみなしたのは、ボルテ夫人がチンギスに言う次の台詞を重視したためである。すなわち、「ジャムカ・アンダは飽きっぽいといわれている。もう、私たちに嫌気がさしている頃となった。このジャムカの言った言葉は私たちに含むところのある言葉である。私たちは、下堂をしないでおきましょう。ここで動けるままひとと離れて、夜を徹して移動しよう、早く。」 (§118)

15 この詳細については藤井 (2010a) を参照。

16 藤井 (2014) を参照。

引用文献

小沢重男

1984~1989 『元朝秘史全釈』3巻及び『元朝秘史全釈続攷』3巻, 風間書房

1997 『元朝秘史』上下巻, 岩波文庫

栗林均・碓精扎布編

2001 『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引, 東北アジア研究センター叢書第4号, 東北大学東北アジア研究センター

栗林均

2009 『「元朝秘史」モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北アジア研究センター叢書第33号, 東北大学東北アジア研究センター

バルト, ロラン (花輪光訳)

1979 『物語の構造分析』みすず書房[原著名は Introduction à l'analyse structurale des récits]

藤井真湖

2009 「チンギス・カンをめぐる伝説の諸相—『チンギス・カンの伝説と歴史の地』という小冊子をもとに—」『愛知淑徳大学現社会研究科研究報告』第4号, 41-56頁。

2010a 『元朝秘史』第53節～第68節の有機的解釈の試み—“ベルグテイの母”の出自の仮説をもとに—『言語文化学会論集』第34号, 167-179頁

2010b 『元朝秘史』第268節におけるイエスイ妃に関する叙述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—『現代社会研究科研究報告』第5号, 41-56頁

2011a 『元朝秘史』におけるベクテル、ベルグテイ、“ベルグテイの母”の考察—“ベルグテイの母”の出身仮説をもとに—『愛知淑徳大学現代社会研究科論集』6号, 21-41頁

2011b 『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図—巻3第110節～巻11第263節における一人称複数形についての考察—『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』7号, 45-66頁

2013a 『元朝秘史』におけるソルカン・シラとジェベ—gelbüre kö' ün=「語り手」の仮説をもとに—『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告』第9号, 17-34頁。

2013b 『元朝秘史』における「語り手」—“サアリ草原”という地名との関連で—

Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн: Түүх, Соёл, Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний V Хурал 2012.07.24-26. Улаанбаатар хот), Редактор: Д.Шүрхүү, Б.Хүсэл, Иmaniши Жүнко, Б.Сэржав, Орчуулгын редактор: Б. Сэржав, Хэвлэлд бэлтгэсэн: А. Сосорбурам, М. Болормаа, pp.112-140.